

は、檜の黒焼羊蹄根等なり、つくる時  
風呂に入

〔奇魂〕病源論 井今名考

古は神氣物氣抔云が多かりしを、今は少くて、中風留飲こび、今云瘡毒、狐憑キツコリなど多類也、是は其凡を云也。

〔花月草紙〕さむきをきらふものは、寒さにさはらず、あつさいむものは、暑にあたらず、われこそすこやかにして遠ざと行くとも、つかるゝことなしといふものは、おほくあしに病を生ず、われは目のあきらかなるにや、はるかなるもの、かすかなるものといへども、のがすことなしといふものは、かならず目にやまひを生ず、けふはかしらいたみ、きのふはむねのあたりふたがりぬと、日ごとにいふものは、大なるやまひうることまれなり、わかきをよりくすりのみしことなし、やまひはいさ、かもえらずといふものは、とみに大なるやまひをうるといへば、やむことなきひとき、たまひて、げにもとてうなづきたまひしとか。

〔技癢録〕回光反照

人疾篤、俄而飲食加倍、言色俱見、愈狀者、其死必近、俗謂之間晴、言如久霖中間假見晴色也、嘗從舌官訪之清客、朱鑑池、朱答、名曰回光反照。